

てん菜の秋植栽培について

江藤博六・梅木佳良
(宮崎県総合農業試験場)

Eto, H. and UMEKI, Y.

On the Autumn Transplanting Cultivation of Sugar Beet

てん菜の移植栽培は、暖地においては従来夏植を中心に検討が進められて来たが、夏の高湿による生育初期の立枯、或は褐斑病による障害などのため広く農家に普及するまでにはいたらなかつた。その後、直播栽培において初秋播栽培が検討されるに及び、移植栽培においても従来よりもおそい移植——秋植が考えられるようになった。

一方、南九州での畑における主要作物は甘藷で、畑でのてん菜栽培を考える場合には、甘藷跡への導入について検討されねばならない。甘藷収穫後におけるてん菜栽培は、直播ではおそすぎるので、必然的に移植——秋植についての検討が必要になつてくる。

てん菜の秋植については、既に江畑氏、今村氏等の報告があり、筆者も先に簡単な成績を紹介したが、ここでは昭和37～39年度に行なつた苗床日数と移植期についての試験結果から、比較的順調に経過した39年度の成績をもとにして報告する。

1. 試験方法

KW-Eを用い、8月28日と9月8日の2回に播種、10月12日、同22日、11月2日に移植し、育苗間隔は10cm×5cm、10cm×10cmとした。肥料は、苗床では堆肥2,000、珪カル300、硫酸70、過石100、塩加30、

硼砂1 (g/m²)、本畑では堆肥250、珪カル40、県標準硼素入複合肥料(N5、P14、K15%)10、を基肥に施し、追肥に尿素1.6+1.0 (kg/a)を施用。栽植密度1,000株/a、斜植とし4月22日収穫した。

2. 試験結果

(1) 苗の生育

苗床日数の長い程、移植時の苗は大きかつたが、草丈や生葉数等の調査から、65日では55日との差が少なく、生育の停滞が見られた。しかし育苗間隔を広く(10cm×10cm)にすると、地上部の生育も増大した。なお同一苗床日数についてみると、一般的にこの程度の播種期では早播きのもの程生育がよいことが認められた。

(2) 移植後の生育

活着には、苗床日数や移植時期のちがいによる差は見られなかつた。

活着後の生育は第1表のとおりで、生育が進むにつれてその差は少なくなるけれども、一般的傾向として播種期が一定の場合には、苗床日数の短い苗を早く本畑に移植した方が生育量が多い。また移植期が一定の場合には、早播して苗床日数の長いものの方が生育量が多く、同一苗床日数の場合にも早播のもの程生育量

第1表 移植後の生育

No.	播種期～移植期		12月2日			2月17日			4月22日(収穫時)							
	月	日	苗床日数	生育期間	苗圃	草丈	生葉数	根径	草丈	生葉数	根径	草丈	生葉数	根長	根径	
1.	8.	28	~	10.12	(45)	(10×5)	45.4	17.0	4.0	44.3	25.1	5.4	37.1	43.1	14.7	7.1
2.	"	"	~	10.22	(55)	(")	43.8	14.6	3.2	36.7	23.5	4.7	30.0	41.2	14.2	6.9
3.	"	"	~	11.2	(65)	(")	48.7	11.5	2.5	42.5	22.1	4.1	31.5	40.2	15.1	6.2
4.	"	"	"	"	(")	(10×10)	49.4	12.1	2.8	44.8	22.9	4.3	31.9	42.3	15.1	6.6
5.	9.	8	~	10.22	(45)	(10×5)	35.4	11.7	2.4	31.8	20.0	4.1	30.5	42.8	15.0	6.8
6.	"	"	~	11.2	(55)	(")	42.2	9.8	2.0	37.4	19.6	3.8	31.8	37.1	14.2	6.3
7.	10.	12	~	(直まき)			16.8	7.8	0.9	19.6	18.6	3.6	25.3	35.8	17.0	6.0

第2表 根重及び糖分

No.	播種期～移植期		a 当根重	ブリックス	糖 度	a 当可製糖量				
	月	日								
1.	8.	28	~	10.12	(45)	(10×5)	336	19.5	16.4	44.1
2.	"	"	~	10.22	(55)	(")	296	18.6	15.4	35.8
3.	"	"	~	11.2	(65)	(")	244	17.1	13.9	26.2
4.	"	"	"	"	(")	(10×10)	271	17.3	14.1	29.6
5.	9.	8	~	10.22	(45)	(10×5)	279	17.9	14.7	32.1
6.	"	"	~	11.2	(55)	(")	237	16.3	12.9	23.1
7.	10.	12	~	(直マキ)			256	16.9	13.6	26.6

が多い。育苗密度との関係では、密度の疎であつたもの程木畑での生育量も多かつた。直播は同日移植のものに比べて年内の生育は極端に劣るが、徐々にその差は小さくなつた。然し収穫の時にも根長以外はなおかなりの生育差が見られた。

(3) 根重及び糖分

根重及び糖分は第2表に示したとおりで、木畑での生育の良否とよく一致し、播種期が一定の場合には、苗床日数を短くして早く移植した方が、苗床日数の長いものより根重も多く、糖度も高かつた。

また苗床日数が同じ場合には、早播、早植のもの程生育がよく、根重、糖度もよかつた。育苗密度との関係でも、生育のよかつた密度の疎なものが、多収高糖を示した。10月12日直播したものとの比較では、10月22日までの移植のものは直播よりも多収を示したが、11月2日移植では育苗密度が10cm×10cmのように広いもの以外は減収した。然しこの場合でも糖度は、9月8日播～11月2日移植を除いて移植区の方が高かつた。可製糖量は根重とほぼ同じ傾向であつた。

3. 考 察

苗床日数は、育苗密度10cm×5cmの場合に、55日程度で個体間の競合が大きくなり生育が停滞してくるが、10cm×10cmに育苗間隔を広げると苗の生育もよく、収量も増加する。然し苗床面積や育苗労力等から考えると、育苗密度は10cm×5cm程度が適当と思われるので、移植期が10月中旬頃の場合は50～60日程度の苗、10月上旬頃の場合は40～50日程度の苗(移植

時期が早い時に苗床日数の多い苗——8月中旬播の苗を用いると褐斑病のおそれがある。)が適当であろう。苗床日数30日以内では苗が小さいので植えたいみが大きく、問題である。

移植時期の限界は、根重をどの程度におさえるかということと、最低糖度とによつてきまつてくる。11月に入つてからの移植では苗床日数を65日位に長くしても、工場原料として考えられている最低糖度14を下廻るので、10月末が植付の限界と考えられる。然し10a当り3ton程度の根重を期待するならば、10月20日が限界と推定される。

収穫期の限界は、初秋播栽培と同様4月下旬と考えられ、この時期になると場合によつては抽苔が見られる。この試験で用いたKW-EはKW-AA程の耐抽苔性はないが、導入2号よりは抽苔しにくい。それでもなお早播のものでは約70%の抽苔を見ている。ただ、この場合抽苔といつても抽苔長約12cmであり、また抽苔してもかなりの糖度を保っているの、それほど問題にしなくてもよいかも知れないが、今後はやはり抽苔難の品種を考えるべきであろう。直播との比較では、現在の品種では10月中～下旬の直播では十分な収量、糖度を期待出来ないの、10月に入つてからは移植の方が好ましい。

以上のような結果から、甘藷跡へのてん菜の導入を考える場合、現在のところでは秋播栽培による外はなく、甘藷堀取後出来るだけ早い時期に、予め準備しておいた苗——10月上旬なら40～50日程度、10月中旬な

らば50～60日程度の苗を移植することにより，糖度も によれば甘藷跡へのてん菜作付を十分考慮に値すると
かなり高く収量も 300kg/a 近く期待出来る．秋植栽培 云えよう．（文献省略）
